

〔翻訳〕

ザストロツィーロマンス (6)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第十二章

なおもマチルダは岩の上に座っていた——
周りで荒れ狂う嵐をなおも凝視していた。

自然の戦いは一時止んだ。その後には、霊廟
の静寂のような深くて恐ろしい、絶え間ない静
寂があった。マチルダは物音を聞いた——足
音は誰れのものか聞き分けられた。目を上げ
ると、強烈な稲妻の閃きでザストロツィのそび
え立つような姿が目の前に浮かび上がった。

一瞬の稲妻が薄れると、その巨大な体軀は再
び暗黒に飲み込まれた。すさまじい響をたてる
雷鳴が天空一帯に狂ったように轟き渡った。そ
して彼がマチルダの前に立った時、きらめく閃
光でザストロツィが近づいて来たことがわか
かった。

彼の接近に驚いたマチルダは、話しかけられ
たときぐっとし、このものすごい、大荒れの時
刻にふたりを同じ場所に導いた不思議な偶然に
ついて思いを馳せて、言いようのない畏怖の念
を感じた。

「間違いなく彼の感情は私と同じように激し
くて抵抗できないものなのだ。たぶんそれで私
に会いにここへ来たのだろう」

こう考えて、彼女は身震いした。けれども、
自分をぞっとさせた恐怖感を押し殺して、どう
して森林にやって来たのかと尋ねた。

「あなたがここにやって来たのと同じだ、マ
チルダ」ザストロツィが答えた。「私たちふ
たりを駆り立てる同じ神秘的な力が疑いもなく
共鳴を引き起こして、この恐ろしい嵐の中で私
たちを同じ場所に導いたのだ」

「ああ！」マチルダが叫んだ。「どうしたら
かたくななヴェレツィの心に触れられるで
しょう？ あの人は今でも私を軽蔑しています
——あの人はユリアの思い出に身を捧げてい
ると断言していますし、あの女が死んでもあの
人の献身の気持ちは弱まっていません。どうし
たらいいでしょう？」

マチルダは言葉を切った。そして、ひどく動
揺してザストロツィの返事を待った。

ザストロツィは落ち着いて、頂上を天に向
けてもたげている岩山のように不動で立ってい
た。

「マチルダ」彼は言った。「明日の夕方、あな
たの心がずっと前から焦がれている幸福への道
が開かれるだろう。たとえ実際には、その時に
起きる出来事がヴェレツィの心を完全には捕
らえないにしても。しかし、嵐が激しさを増し
てきた——避難しよう」

「ああ！ 嵐など気にしないで」ザストロツ
ィの邪悪な暗示で期待が我慢の限度にまで高
まったマチルダが言った。「嵐など気にしない
で話を続けてください、私があなたの足元で息

絶えるのを見たくなければ」

「あなたは自然が荒れ狂うのを恐れない——私もそうだ」ザストロツィが答えた。「もう一度断言しよう。明日の夕方、あなたがヴェレツィをこの場所に連れてきたら——ここで起きる出来事の中で、あなたが確かに持っている平常心を發揮すれば、ヴェレツィはあなたのものだ」

「ああ！ 何ですって、ザストロツィ、ヴェレツィは私のものになる？」思いもよらない幸福の予感で心が度を越した喜びにあふれて、マチルダは聞き返した。

「もう一度言おう、マチルダ」ザストロツィが答えた。「もしあなたが剣の切っ先に立ち向かうのを恐れなければ——もしあなたがヴェレツィに命の恩人だと思わせたなら——」

ザストロツィは言葉を切ると、マチルダはその計画を見抜いたことを知らせた。その計画が幸福の基盤だと彼女の有頂天の空想は思い描いた。

「その女性が自らの命を賭けて自分の命を救ってくれた後、彼はその人を冷たく拒めるだろうか？ これ以上ないくらいの大きな不運な目にあっても失われなかったその気高い心情がそれを許せるだろうか？——いや」

このような考えでいっぱいになった頭がのしかかる幸福の予感で有頂天になって混乱する中、マチルダは城館へと引き返した。

つい先ほどまで荒れ狂っていた猛烈な嵐は過ぎ去っていた——雷は今では小さい、判然としないこだまとなって、遠く北へと延びている岩山の連なり中で響いていた——マチルダが城館に入る頃には青い、雲のほとんどない天空は無数の星で散りばめられていた。遅い時刻だったので、彼女は自分の部屋に向かった。

いつものように眠りは彼女の枕元から逃げな

かった。しかし、極度の眠気に負けて、彼女はすぐに眠りに陥った。

混乱した夢が想像の中で漂った。ある時には、彼女はヴェレツィを手に入れたようだった。別の時には、自分の熱烈な抱擁から彼が奪い取られ、目に見えない力によって岩山かあるいは人の通わない広大なヒースの荒野へと運ばれると、彼女は虚しくその後を追おうとして道のない砂漠の中で迷ってしまったようだった。

混乱した、脈絡のない夢から醒めると、彼女は起きた。

波のように揺れる森林を見渡す窓辺に彼女のえじきは座っていた。彼を見つめる時、心は高揚して恍惚となり、ひどく乱れた感情でいっぱいになった。

マチルダがそばに座って、指でこの上なく魅惑的な、この上なく哀愁を帯びた音楽をハーブから紡ぎ出すと、彼の心はうっとりとするような哀愁でぞくぞくした。涙が頬を勢いよく流れ落ちた。穏やかではあるが深い溜息が胸を波打たせた。無邪気な目はやさしくマチルダをじっと見つめ、自分自身の法外な願望を満たすことだけを願う女に対して思いやりで輝いたが、それは彼の幸福の期待を破壊するものだった。

彼女は激しい喜びとともに自分のえじきをじっと見つめた。それでも、心の情熱を抑えると、うつむいた目には従順さが、うまく装った感性が、はっきりと浮かんだ。

期待でもどかしく思う気持ちを押し殺して、彼女は夕方を待った。その時には幸福の揺るぎない基礎を彼女が築くだろうとザストロツィは断言したのだった。

平然と剣の切っ先に勇敢に立ち向かおうと彼女は決意した。血を流す決意をした。そして自分の生き血が流れることになっても、その出来事に立ち向かおうと思った。

夕方がついにやって来た。辺りは霧でおぼろになり、大気はいつもよりも冷たかった。それでもマチルダの懇願に応じて、ヴェレツィは森林へ一緒に行った。

その場所に向かって行く時、マチルダの胸は想像もできないくらいの喜びでぞくぞくした。手足は歓喜で震え、ほとんど体を支えられなかった。いつにない感覚——これまでに味わったことのない感覚に胸が騒いだ。それでも、心を鋼のように強くして決然としていれば、この世のものとは思えないほどの大きな喜びで報われるのだと自分に言い聞かせ、恐れずに進んだ。

そびえ立つ松の木々が嵐のような風の中で波打った。——たそがれの陰がほの暗い森林近くに迫っていた——風はおさまり、深い、陰鬱な静寂が支配していた。

ふたりは今、マチルダの幸福の基礎を築くかもしれない出来事の舞台になるだろうとザストロツィが断言した場所に着いた。

彼女は非常に激しい感情にかき乱されていたので、手足がごとごとく震えた。それでヴェレツィは彼女が恐れている理由を尋ねた。

「ああ、何も、何もありません！」マチルダが答えた。しかし彼のやさしい問いかけによって歓喜をいっそう確実に予感して全身が十倍もの動揺で震え、胸はさらに押さえられない大きな喜びでいっぱいになった。

右手には森林の木々の密集した群葉があって、誰がそこに潜んでいてもわからない状態だった。左手には恐ろしい絶壁が口を開けていて、そのふもとでは、不格好で巨大な岩の塊の回りで、耳をつんざくような瀑布が騒々しい音をたてて激しく打ちつけていた。そして、その向こうには、黒くなった山のゴツゴツした頂上がそびえ立っていた。

ふたりは断崖に向かって進んで行った。マチ

ルダは目の眩むような高台に立った——彼女は意識を失いそうになり、深い谷底の上に差しかかっている巨大な松の枝につかまった。

「何と恐ろしい深さでしょう！」マチルダは叫んだ。

「ほんとうに恐ろしい」真下のぞっとするような深さを思いにふけてじっと見つめながらヴェレツィが言った。

ふたりはしばし無言のまま立って、その景色を眺めていた。

足音が聞こえた——勇気を奮い起こしてふり返る時、マチルダの胸は喜びと不安の入り混じった感覚でぞくぞくした。——ふたりの方に男が向かって来た。

「何の用だ？」ヴェレツィが叫んだ。

「復讐だ！」剣を高くかざしてヴェレツィの胸にそれを突き刺そうとしながら、悪党が答えた。しかし、マチルダが腕を上げると剣はそれを突き刺して、ヴェレツィには当たらなかった。前に飛び出すと、彼は地面に倒れた。すると、悪漢は即座に密集した森林の中に駆け込んだ。

マチルダの雪のような腕は真紅の血糊で染まっていた。傷は苦痛だったが、勝利の表情がその目から発した。血は止めどなく腕から流れ、ふたりが立っている岩を真紅に染めた。

ヴェレツィは地面からぱっと立ち上がると、マチルダの服を流れ落ちている血を見て、恐怖の口調で、どこを負傷したのか尋ねた。

「ああ！ そのことはどうでもいいです」彼女は叫んだ「私に言ってください——ああ！ 言ってください」彼女は不安をうまく装った声で言った「あなたはひどい傷を負ったのですか？ ああ！ 剣の切っ先が私の腕を突き刺した後あなたの生き血を吸ったと思った時、何という恐怖感が私を震わせたことでしょう」

「ああ！」ヴェレッツィが答えた。「私は負傷していません。でも、城館に急いで戻りましょう」

それから彼はシャツの一部を引き裂いて、それでマチルダの腕を縛った。ゆっくりとふたりは城館の方に進んでいった。

「ヴェレッツィ、どんな悪党が」マチルダが言った。「私の幸福を羨んで、私が千回でも喜んで自分の命を投げ打ってもよいと思っている人の命を狙ったのでしょうか。ああ！ ヴェレッツィ、私はとても神様に感謝しています。命取りとなる剣をあなたの心臓から逸らせてくださったのですから」

ヴェレッツィは答えなかった。しかし、心が、感情が、マチルダの行動に動かされるのはどうしようもなかった。気高くも、あのように危険をものともせず、彼の命を救うために自らの命の危険を冒すくらいの激しい情熱を思っ、彼の胸は彼女へのやさしさでいっぱいになった。それで、今では彼女には何も拒めないという気持ちだった。もし彼女が求めるのなら、彼の幸福の惨めな残骸を捧げることも。

一方、マチルダの胸は言葉で言い表せない気持ちでいっぱいになっていた。幸福の期待に運ばれた彼女の心は、燃えるその目から勝ち誇った眼差しとなって閃いた。彼女はヴェレッツィを両腕に抱き締めるのを、また彼は自分のものだと言うのを、抑えられそうもなかった。しかし、用心深さのために、また早まった愛の宣言がどのように受けとめられるかが心配で、思いとどまった。

ふたりが城館に着くと、ヴェレッツィは近く的女子修道院の医者が呼びにやった。

医者はすぐにやって来てマチルダの腕を調べると、不快な結果は生じないでしょうと断言した。——自分の部屋に下がると、これまでヴェレッツィの前では静まっていた有頂天の気持ち

が今や理性によって抑制されず、マチルダの五感に陶然とした喜びに飲み込まれた。

彼女はベッドに身を投げ出し、想像で誇張されたあらゆる色彩でザストロツィの計略が開いて見せてくれた大きな喜びを思い描いた。

現実でないこの上ない幸福の幻影が混乱した空想の中で一晩中漂った。手に触れられそうな夢がかき乱された頭に押し寄せる時、この上ない幸福感と絶望とが交互に入れ代わる中で彼女の意識はくらくらした。

ある時には、彼女はヴェレッツィがふたりの結婚に同意してその手を彼女に差し出すのを想像した。だが、彼女が触れると手から肉がぼろぼろと崩れ落ち、金切り声を上げる恐ろしい姿となって彼は彼女の見えない所へ逃げた。再び銀色の雲が彼女の目の前を漂い、脈絡のない、乱れた幻影が朝まで彼女の想像を占有した。

次の朝マチルダと顔を合わせた時のヴェレッツィの態度はいつになくやさしく、愛情がこもっていた。そして心配そうな声で彼女の体の具合を尋ねた。

彼女の頬を染めている生氣あふれるバラ色の輝き、彼女のきらめく目に踊る生氣あふれる勝ち誇った眼差しから、その質問は不要に思えた。

彼女が動揺しているものの歓喜を抑制した表情で不運なヴェレッツィを見つめた時、露のようなものでその目が一杯になった。

なおも彼女は、勝利の喜びをいっそう確かなものにするために、勝利の時を引き延ばそうとした。それで、えじきをあとに残して、ザストロツィを探しに森林の中へさまよい入った。田舎家に着くと、彼は外に出て行ったのがわかった。——まもなく彼に出会った。

「ああ！ この上なく頼りになるザストロツィ！」マチルダは叫んだ。「何という喜びの源泉を私に開いてくれたのでしょうか！ ヴェ

レツィは私のものです——ああ！ 思っただけでうっとりとしませう！ 永久に私のものです。あの人がいつも私に対して取っていたあのよそよそしさは、甘い、恍惚としたやさしさの表情に変わっています。ああ！ ザストロツィ、私の最上の、心からの感謝を受け取ってください」

「では、ユリアは死ぬ必要がないのだ」ザストロツィがつぶやいた「あなたがヴェレツィを手に入れた以上」

この上なく恐ろしい復讐の計画がこの瞬間ザストロツィの心に閃いた。

「ああ！ ユリアは死ななければなりません」マチルダが言った「そうでないと、私は安心できないでしょう。あの女の面影はヴェレツィの心に大きな影響を持っていますから、あの女が活着ていることをあの人が知ることになれば、その結果私に対してきっとよそよそしくなります。ああ！ あの女が死んだとすぐに聞かせてください。あの女が死ぬまで、邪魔されずに幸福を味わうことができません」

「あなたがたった今宣告したのは、ユリアの死刑執行だ」密集した木々の中に姿を消しながらザストロツィが言った。

マチルダは城館に戻った。

ヴェレツィは彼女が戻ると、そのように負傷しているから歩いてけがをするのではないかと心配した、とやさしく言った。しかし、マチルダはその懸念を静め、彼を興味深い会話に引き入れた。それは彼の愛情を引きつけることが目的でないよう思えた。とはいうものの、彼女の言い方によって伝えられる考えはそのことと非常に巧妙に関連していたし、ヴェレツィの感情に非常に強く訴えかけたので、彼はマチルダを愛するのが当然だと確信した。それでも、心の中では、理性を無視して——内省を無視し

て——それは不可能だと彼に告げるものを感じた。

第十三章

魅惑的なほほえみ、慎み深く見える目
その美しい輝きの下に、天を裏切って
潜むのは、不可解な狡猾さと残酷さと死

トムソン

それでもマチルダのへつらい——その絶えない気配り——は彼女に対してヴェレツィにやさしい愛情を抱かせた。彼の目に映る彼女は、自らの命の危険を冒して自分の命を救ってくれた人、いつまでも続くと思える熱烈な愛情で自分を愛してくれる人だった。それで、今でもユリアの思い出を崇めているのと同じ熱狂的にいとおしい気持ちで彼女を見ることはできなかったが、それでも彼女を尊敬する——誠実に彼女を尊敬する——かもしれなかったし、自分が彼女と結ばれることを以前のように嫌悪を感じなかった。しかし、ユリアと交わした会話が心によみがえってきた。ふたりが自分たちの速やかな結婚について話した時、彼女がある考えを表明したのを彼はよく覚えていた。それは、この世での結びつきは来世にまで続くでしょう、また、この世で彼の心が選んだものは、感情の一致によって天においても結ばれるでしょう、というものだった。

この考えはユリアの追憶によって神聖化されていた。しかし、非現実の幻影としてそれを心から追い払うと、再び彼の高潔な感謝の心情が支配した。

こういった考えの中に迷い込み、一連の思いに没頭して自分の足どりがどこに向かうのか自覚せずに、彼は城館を出た。その空想は森林の静寂に乗って漂っているように思える低い

つぶやきによって妨げられた。それはほとんど聞き取れなかった。それでもヴェレッツィはそれが何なのか知りたいという、説明できない気持ちになった。彼はその方へ進んだ——それはマチルダの声だった。

ヴェレッツィがさらに近づくと、中から嘆き声が聞こえた。彼は懸命に耳を澄ませた。すすり泣きは激しい叫びとなり、マチルダの口から吐き出される言葉はほとんど聞き取れなかった。彼はなおも耳を澄ませた——マチルダの魂を揺すぶる悲嘆の嵐が一時止んだようだった。

「ああ！ ヴェレッツィ——残酷で、思いやりのないヴェレッツィ！」情熱の激しい発作が彼女の頭を捕らえた時、マチルダが叫んだ——「あなたはこのようにあなたを熱愛している者を望みのない愛の中で生き長らえさせ、私のようにあなたを崇拜している者が狂気に至るほど激しく苦悶するのを目撃するつもりですか？」

このように話す時、言葉の最後に長い溜息をついた。

立ちつくしたまま、ヴェレッツィの心はさまざまな感情に乱れた。しかし、ついには駆け寄ると、マチルダを両腕で起こし、やさしく慰めようとした。

彼が入ってきた時、彼女ははっと驚いた——彼女は彼の言葉を聞かないで、恥ずかしさに負けた様子で体を彼の足元に投げ出し、彼のローブに顔を埋めた。

彼はやさしく彼女を起こしたが、彼の表情から彼女は自分の心配が今報われようとしていると確信した。

やがて大きな喜びが訪れるだろうという勝利の予感で彼女の胸はいっぱいになった。それでも、真意を隠すことが必要だとわかっていたので——彼の愛情を慎みもなく求めるのはヴェレッツィを嫌悪させるだけだろうとわかっていた

たので、彼女はこう言った。

「ああ！ ヴェレッツィ、赦してください。自分は一人だと思っていました——心の秘密の告白をもらっている人はいないと思っていましたから、そのことであなたをこれ以上悩ませるつもり決してありませんでした。ほんとうです。何という恥ずかしい感情を——自分一人でも恥ずかしい——私は表に出したのでしょうか。私があなたを崇拜している情熱は打ち勝ちがたく、抑えられないということをもう隠すことはできません。でも、お願いします。たった今耳にしたことを私に不利なように考えないでください。また、わが身を焼き尽くす宿命的な情熱に打ち勝つことは不可能だと感じている弱い、不幸な女を軽蔑しないでください。

「もう二度と自分の愛を表に出しません、一人の時でも——もう二度と不幸なマチルダの嘆願があなたの耳に届くことはないでしょう。熱烈な情熱に打ち勝つのは、私のようなやさしい者には不可能です」

このように話す時、マチルダは恥ずかしさに負けた様子で、芝土の上に崩れ落ちた。

マチルダを起こす時、ヴェレッツィの心は感謝よりも強い、尊敬よりも熱い、讚美よりも愛情のこもった感情でやさしくなった。彼女の均整の取れた姿は、興奮した彼の空想には十倍も麗しく輝いた。いとおしく思う気持ちが突然沸き起こって、彼は彼女の足元に体を投げ出した。

忘却の川にいるような無感覚が彼の意識に忍び寄った。そして彼がマチルダの前にひれ伏した時、彼の混乱した頭は今に至る自分の生涯のあらゆる出来事をすっかり忘れてしまった。情熱的に声を張り上げて、彼は無限の愛を誓った。

「ああ、マチルダ！ いとおしい、天使のようなマチルダ！」ヴェレッツィは叫んだ。「今でも何が自分の目を眩ましていたのか——あ

なたへの熱愛を——状況によって変わることはない——時によって消されることのない熱愛を何が妨げていたのか、私は気づいていないのです！」

有頂天のマチルダを両腕で抱き締めた時、官能的な、狂わんばかりの愛の火が彼の血管を焦がした。そして、情熱でおよそ明瞭さを欠いた口調で、永遠の貞節を誓った。

「では、絶えることなくあなたにこの身を献げるといふ誓いを受けてください、愛するヴェレツィ」マチルダが叫んだ。「永遠に変わらない愛の誓いを受けてください」

ヴェレツィの全身がいつにない、熱烈な感情に突き動かされた。彼はマチルダを妻と呼んだ——突然沸き起こった愛情に興奮して、彼は彼女を胸に抱き締めた——「そして私たちのような愛は」分別を無くしたヴェレツィは叫んだ。「人の法律という空虚な結びつきを必要としませんが、また私たちの愛はそれに与えられるかもしれないいかなる認可も必要とはしませんが、結婚の祝宴のために直ちに指示を出しましょう」

マチルダは歓喜して同意した。このような喜びの感情は経験したことがなかった。心の中の感情が燃えるような目の高揚した眼差しの中にぱっと閃いた。自分のえじきを見つめる時、強烈な、勝利の喜びで心がいっぱいになった。彼の穏やかに光る目には今、官能的な表情がはっきりと浮かんでいた。彼女の心臓は大きな喜びで激しく鼓動した。そして、ふたりが城館に入る時、彼女の胸の高まりゆく感情は言葉を発せられないほど混乱していた。

情熱に興奮して、彼女はヴェレツィをどきどきする胸に抱き締めた。そして、興奮した情熱の陶酔に打ち負かされ、彼女の意識は混乱した、言い表しがたい喜びでくらくらした。新た

な、激しい情熱が同じようにヴェレツィの胸にも高まった。彼は彼女の抱擁に熱をこめて応じ、激しく有頂天になって彼女を抱き締めた。

しかし、今彼がマチルダを見ている時の熱愛の気持ちは、ユリアへの愛を彩っていた貞節で、穏やかな感情とは異なる感情であった。その情熱は自分の生きている限り終わらない、と彼は浅はかにも思っていたが、別の女の手管によって消し去られてしまった。

今やマチルダの目的は達せられた——翌日には彼女は花嫁になるだろう——翌日には彼女のこよなく甘い、強く願っている目的が達成されるであろう。

今か今かとじりじりして彼女はその到来を待った。

ゆっくりとその日が過ぎ、時計は進みながらゆっくりと時を告げた。

次の日がついにやって来た。マチルダは眠りのなかった寝椅子から起きた——自分のえじきを抱き締める時、激しい、有頂天の勝利感がその目に閃いた。彼はそれに応じた——彼女を愛しい、変わらず愛しい伴侶と呼んだ。そして、狂おしいまでの愛に有頂天になって、ふたりを結びつけてくれる修道士の到着が待ち遠しいと告白した。あらゆるへつらいが——思索を追い払うと思えるあらゆることが、その日マチルダによって実行された。

修道士がついにやって来た。致命的な儀式——ヴェレツィの平安にとって致命的な——が執り行われた。

壮麗な祝宴が事前に手配されていた。マチルダの勝利を高める一助となると思えるあらゆる贅沢な珍味が、あらゆる高価なワインがふんだんに供された。

マチルダの喜び、心に感じる勝利は言葉に出せないくらい大きかった——隠せないくらい

大きかった。彼女のきらめく目が発する眼差しは、心の奥底の高揚を雄弁に語っていた——言葉で言い表せない強烈な喜びを雄弁に。

度を越した喜びに駆り立てられて、彼女はテーブルからぱっと立ち上がると、想像もつかないほどの幸福で有頂天になってヴェレツィの手をつかみ、騒々しい娯楽や、高まっていく、心に触れるメロディの響に合わせたいろいろな踊りに彼を引き込んだ。

「さあ、マチルダ」ついにヴェレツィが叫んだ「さあ、有頂天になってくたびれました——言葉に出せないほど楽しくて気分が悪いです。部屋に下がって、この日の喜びを夢の中で辿りましょう」

ヴェレツィはこの日が自分の悲惨な未来の始まりであるとは思ひもしなかった。彼は、奔放な官能のバラが見事に咲き誇る真ただ中で、後悔、恐怖、絶望が生じ、ユリアが忘れられて、そのような有望そうな、そのような陶然とするような見込みが打ち砕かれるとは思ひもよらなかった。

朝がやって来た。想像もできない感情——それらを感じたことのない人たちには想像もできない——が言葉では言えないくらいに幸福な気分でマチルダの心を膨らませた。彼女の情熱のあらゆる障壁が打ち捨てられた——あらゆる妨害が制圧された。それでもなお、その胸は激しい情熱が戦う舞台だった。

空想が度を越した喜びとともに描き出したあらゆるものを所有していても、心を落ち着かせ、激しい感情を静めて澄みきった幸福で満たす、天真爛漫で穏やかな喜びを彼女は感じるどころではなかった。そう——彼女の頭は有頂天でくらくらしていた。想像上の、現実ではない幸福で激しく、混乱した有頂天。彼女の脈泊は、彼女の神経は満たされた願望と待ち望む願望の

喜びでずきずきしたけれども。それでもなお、彼女は幸せではなかった。彼女は幸福に必要なあの平穏を楽しめなかった。

このような心の状態で、短時間彼女はヴェレツィから離れた。悪巧みの協力者と会う約束をしていたのだ。

まもなく彼女は彼と出会った。

「尋ねる必要はないな」ザストロツィは叫んだ。「勝ち誇ったその眼差しにはっきりと読み取れる。ヴェレツィはあなたのものだということが、この前会った時に協力して練り上げた計画で、あなたの心が切望していたものを手に入れたということが」

「ああ！ ザストロツィ！」マチルダは言った——「親切で、すばらしいザストロツィ。あなたに対して私が持っている感謝の気持ちを使い表せる言葉があるでしょうか——この上ない、天国のような無上の幸福を使い表せる言葉があるでしょうか。あなたの忠告のおかげです。それでもなお、みごとに咲いた愛のバラの真ただ中で——有頂天の官能に酔いしれている真ただ中で——不安が、花を枯らしてしまう冷たい不安が私の幸福の希望をくじくのです。ユリアは、あの嫌な、憎むべきユリアの面影は、その他の点では間違いなく確実な私の永遠の喜びを脅かす種なのです。あの女を破滅の淵に投げ入れることはできないでしょうか——私の友の何か他の計略で、あの女を生きている人たちの数から除くことはできないのでしょうか——」

「もう十分だ、マチルダ」ザストロツィが遮った。「もう十分だ。今から六日後にここで会おう。その間、よくない予感に現在の幸福をむしばませないように。心配無用。あなたに忠実なザストロツィがやって来たら、あなたが永遠に味わいたいと願う心からの幸福を当てに

していい]

このように言ってザストロツィは立ち去り、マチルダは城館への道を引き返した。彼女の心がずっと前から渴望していた喜び、陶酔の真ただ中で——彼女がこの世での幸福を構成しているのは彼の抱擁だけだとたわいなくも思っていた真ただ中で、拷問のような、むしばんでいく思いがマチルダの胸に取りついていた。

未来の喜び——この上なく悪魔的な復讐を行うことで満足して確立される喜び——の計画を深く考える間——目は地面に釘付けになっていて、自分がどの道を進んでいるのかを気に留めず、マチルダは森林にそって進んで行った。

ひとつの声が彼女を空想から呼び覚ました——それはヴェレツィの声だった——聞きなれた、やさしい、愛のこもった声が彼女の感覚に強く訴えた。彼女ははっとした。それで、彼の方に急いで、自分がいないために伴侶のやさしい心にかき立てられた不安をすぐに静めた。彼は心配して、彼女を探すために城館を後にしたのだった。

恐れに染まらない、物思い汚されない喜びが、有頂天の幸福が六日間マチルダの胸の中で支配した。

五日が過ぎ去り、六日目がやって来た。夕方になると、待ちきれない思いのマチルダはせかせかとした足どりで森林を目指した。

夕方は薄暗く、厚い霧が空一面を覆っていた。低空を虚ろに吹く風が巨大な松の木々の中では悲しげな、溜息のような音を、岩が突き出た所に生えている灌木の枯木の間では低いシューという音をたてた。

マチルダはザストロツィの到着を今か今かと待った。ついにそのそびえ立つような姿が岩

の割れ目から現れた。

彼は彼女の方に向かってきた。

「成功だ！ 勝利だ！ マチルダ」勝ち誇った調子でザストロツィは叫んだ——「ユリアは——」

「それ以上言い添える必要はありません」マチルダが遮った「親切で、類まれなザストロツィ！ お礼を言います。しかしそれでも、どうか教えてください、どのようにしてあの女を破滅させたのか——いかなる拷問のような、恐ろしい苦しみで、あなたはあの女の魂を永遠の中に投げ込んだのかを？ あの女は剣の切っ先で朽ち果てたのですか？ あるいは毒の苦しみで苦しめ悶えるあの女を墓へと送り込んだのですか？」

「そのとおり」ザストロツィが答えた「彼女は抗しがたい痙攣に負けて私の足元に倒れた。侯爵夫人の薄れゆく意識をすぐに回復させようとする者が私以外にいたのだろうか？——人の集まりの熱気で一時的に圧倒されたのだと述べて彼女の失神を説明するのに、私ほどふさわしい者がいたのだろうか。だがユリアの意識は永久に逃げ去った。そしてベネチアで一番早いゴンドラがあなたの城館の方向へ私を遠く運んだ時になって初めて十人審議会が捜索を始めたが、犯人を見つけ出すことはなかった。

「ここに私は留まっていなければならない。というのも、もし私が見つければ、私たちふたりにとって致命的な結果になるのは明らかだから。さしあたっては、さようならだ」彼はつけ加えて言った。「その間、幸福があなたと共にあるように。しかし、ベネチアには行かないように」

「こんなに遅くどこに行っていたのですか」彼女が戻ってくると、ヴェレツィがやさしく尋ねた。「夜風が、とりわけこのように湿った

夕べ風があなたの体によくはないのではないかと心配していました」

「いいえ、いいえ、愛するヴェレッツィ、そんなことはありません」口ごもってマチルダが答えた。

「思いに沈んでいるようですね、もの悲しげですね、私のマチルダ」ヴェレッツィが言った。「私に心の思いを打ち明けてください。何か私の知らないことが胸にのしかかっているのではないのでしょうか。」

「生まれつき快活なあなたの心を押さえつけているのは、この人里離れた城館の寂しさでしょうか？ ベネチアに行きましようか？」

「ああ！ いいえ、いいえ！」あわててマチルダが強い調子で遮った「ベネチアはだめです——ベネチアに行くのはだめです」

ヴェレッツィは少し驚いたが、彼女の態度を気分が悪いせいで、このことは立ち消えた。

目立って重要なこともなく、ひと月が過ぎ去った。マチルダの情熱は満ち足りても鎮静されず、時間によって克服されず、なおも以前の激しさで沸き立っていた——なおもこの世のあらゆる喜びはヴェレッツィが中心だった。そして想像の描く幻想の中で、彼女はこの幸福が永遠に続くものと思った。

ある夕方のことだった。ヴェレッツィとマチルダが座ってお互いの前で幸せな気分にいる時に召使が入って来て、マチルダに封印された文書を渡した。

内容はこうだった。「ラウレンティーニ女伯爵マチルダは宗教裁判所への出頭を命じられる——この召喚状を受け取り次第、直ちに法廷に出頭のこと」

マチルダの頬はそれを読んで恐怖で青ざめた。召還状——避けられない、抵抗できない召還状がぞっとするような畏れで彼女を襲った。

彼女はそれを胸に押し込もうとしたが、自分の恐怖を隠すことができず、その部屋から飛び出そうとした——しかし無駄だった。彼女の震える手足は彼女を支えることができず、彼女は気を失って床に崩れ落ちた。ヴェレッツィは彼女を起こした——彼女の薄れていく意識を回復させた。彼女の足元に体を投げ出し、この上なくやさしい、哀れをさそう口調で、彼女が突然恐怖に襲われた理由を尋ねた。「そしてもし」彼は言った「私が知らずに何か悪いことをしたのだったら——もし何か私の振舞いがあなたを傷つけたのなら、ああ！ すぐにでも、心から後悔します。最愛のマチルダ、私はあなたをものすごく熱愛しています。だからすぐに言ってください——このようにあなたを愛している私に打ち明けてください」

「立ち上がってください、ヴェレッツィ」恐怖を抱きながらも落ち着いた口調でマチルダは叫んだ。「それでは、真実はまだ隠せないですから、この手紙に目を通してください」

彼女は彼に避けられない召喚状を差し出した。彼はそれを急いでさっと取った。やきもきして息もつかずそれを開いた。だが、自分には破滅をもたらす不可解で謎めいた召還状が集中している眼球に押し寄せた時、おびえたヴェレッツィの非常な驚きをどんな言葉が言い表せるだろうか？ 少しの間、彼は苦しい思いで、無言のまま立ち尽くした。ついに、絶望を押さえた落ち着きで、彼はどうしたらよいだろうかとマチルダに尋ねた。

マチルダは答えなかった。というのも、彼女の心は予測の翼に運ばれて、その瞬間、屈辱と苦悶の死を思い描いたから。

「どうしたらよいだろう？」再び絶望がいっそう深まった口調でヴェレッツィが尋ねた。

「私たちは直ちにベネチアに行かなければな

りません」乱れた精神の機能を取り戻しながらマチルダが答えた。「ベネチアに行かなければなりません。そこなら私たちは安全かもしれないと思うのです。けれども、当面は町の中心から離れた、どこか片隅に私たちの住居を定めなければなりません。私たちは身分を落として所帯を削減しなければなりません。それに、とりわけ際立つのを避けなければなりません。でも、ヴェレッツィは生まれついた身分から身を落として、見捨てられたマチルダの運命に合わせて威厳を捨てるでしょうか」

「マチルダ！ 最愛のマチルダ！」ヴェレッツィが叫んだ。「そのようなことを言うてはいけません。私はあなたのものだということがわかっているでしょう。私があなたを愛していることがわかっているでしょう。だから、あなたと一緒に、田舎家も理想郷です」ヴェレッツィがこのよう話した時、迫まる危険が不安をかき立てる中で、マチルダの目は東の間の勝利の喜びで閃いた。訴追の動機は謎めいていて、判決は上訴不可能という宗教裁判の不安の中で、彼女の心はこの世で彼女が大切だと思っているものの一切を所有していて、すなわちヴェレッツィの愛情を確保していて、喜ばしい感情でぞくぞくしたが、それでも不安と入り混じっていないわけではなかった。

彼女は今、出発する準備ができた。そして、マチルダは召使すべての中から忠実なフェルディナンドだけを連れ、ヴェレッツィに伴われて、夕方のずっと遅い時間になっていたけれども、馬車の中に身を投じた。それから、彼女の意図を知らされずにいるみんなを城館に残して、ベネチアに通じる森林の中の道を行った。

馬車がその前の上り坂をゆっくりと上って行く時に、遠くからはほとんど聞こえない修道院の鐘が十時を打った。

「しかし、マチルダ」ヴェレッツィが言った。「宗教裁判所の吟味を私たちは逃れることができるのでしょうか？」

「ああ！」マチルダが答えた。「私たちは自分のほんとうの姿を見せてはいけません——私たちは変装しないといけません」

「しかし、」ヴェレッツィが尋ねた。「どんな罪で宗教裁判所があなたに対して申し立てしているのでしょうか？」

「異端だと思います」マチルダが言った。「敵は不運な、無実の者に対して異端の罪をかぶせることしかしないのはご存じでしょう。そして犠牲者は恐ろしい苦痛の中で息絶えるか、暗い独房の中で命の悲惨な残骸となって生き長らえるかです」

激しい溜息がヴェレッツィの胸を波打たせた。

「では、それが私のマチルダの運命なのですか？」彼はぞっとして叫んだ。「いや——天はこのようにすばらしい人が苦しむのを許すわけがありません」

その間にふたりはブレンタ川に到着していた。ブレンタ川は真夜中のそよ風の下でアドリア海に向かって音もたてず、静かに流れていた。

土手でらせん状の姿をもたげてそびえ立つポプラの木々は、穏やかな波の上にとても薄暗い影を投げかけていた。

マチルダとヴェレッツィはゴンドラに乗った。ふたりがベネチアの大運河に入る前に、近づいている朝のほのかな灰色が東の天空に縞模様をつけていた。そして、リアルト橋を過ぎると、東の町外れにある小さいが優美な邸宅に向かって進んで行った。

ここのすべてが豪勢ではないものの、ゆったりとして便利だった。そして、中に入る時、ヴェレッツィはここで隠遁生活をしてもいいと言った。

宗教裁判の吟味から安全であるようなので、マチルダとヴェレッツィは何日間か幸せの日々を中断されずに過ごした。

ついにある夕方、幸福の喜びの単調さに飽き

たヴェレッツィは、ゴンドラに乗ってサン・マルコ広場で催される祝祭に行くことをマチルダに提案した。